

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

優しさのバトンをつないで

北辰中学校三年

西にし

彩華さやか

「ようこそ、君と僕の家へ。」

夕弦さんはそう言って私を迎え入れてくれた。私がこれから暮らすその家のまわりには、たくさんの向日葵が輝いていた。初めてその様子を見た時、夕弦さんのあたたかくてやさしい人柄が伝わってくるようで涙が滲んだのを覚えている。

私は一歳二ヶ月の時に捨てられ、それからずっと児童養護施設で育てられた。施設の人たちはやさしく接してくれたけれど、いつも私は孤独だった。中学三年の今、誰のことも心から信じてことが出来なくて壊れそうだった私を救ってくれたのが夕弦さんだった。施設に何度も通い、いろいろな手続きをして、私の里親になってくれたのだ。私はそれがとても不思議に思ったので、

「どうして私にここまでしてくれるの？」

と聞いてみる。彼は口を開いて話し始める。

僕には、忘れられない人がいるんだ。僕が君と同じくらいの時に、彼女に出会ったんだ。その頃、僕は夏休み期間のあいだ、クーラーのきいた涼しい市立図書館に通うことを日課にしていた。そこで勉強すると、家で勉強するよりはかどったんだ。太陽が街中照らしていたある日、いつものように勉強を始めようと、空いている席を探していると、「となり空いてるよ！こつちおいでよ！」

と手招きしている高校の制服を着た少女がいたんだ。それが彼女だった。ひまわりのような笑顔をとった姿がまぶしいと思ったよ。その日は隣に座って少しの間話をした。明るくて快活な彼女とは話しやすかった。次の日もその次の日も彼女を見つけると挨拶をし合う仲になった。目でも追うことも多くなつていったんだ。彼女についてわかったことも出てきた。彼女の頭の中には偏見なんてものがなくて、困っている人がいれば必ず助けに行くような、正義感の強い性格だということ。そして、その証しとして臓器提供意思表示カードを持っていること。これは前に、彼女のカバンのポケットに入っていたのを見たことがあった。僕は臓器提

供の話はなんとなく知っていたけど、そのカードを見たことも聞いたこともなかったもので、とても驚いてしまい、三つめの、提供しないという選択もあったのに、

「どうして臓器提供しようと思ったの？」

と、間抜けな質問をしてしまったんだけど。彼女は、特に気にさわった様子もなく言った。「私がもし脳死の状態になっても、回復なんてできないんだよ？そんなことになるなら、生きていくための機能を必要としている人を助けたいって思わない？明日起きることが分かる人なんていないんだから。私は、私にできることをしたいなって思う。」

これを聞いて僕は感心すると同時に、彼女をかつこいと思った。僕には到底、真似なんてできないだろう。

八月のはじめの日、その日は雨が降っていた。図書館へ行く途中、彼女に会ったため、一緒に行くことにしたんだ。向こうの歩道まで行くのに、歩道橋を渡らないといけない。僕たちは歩道橋の上を歩いて階段を下りようとしたその瞬間。前にいた小さな男の子が階段で足をすべらせた。実際はほんの少しの間だったのかもしれないけれど、僕にとつては長すぎる時間だった。隣にいた彼女がかけ出す様子。そして、男の子を包みこむようにだきしめて落ちていく様子。頭を強く打つたことが彼女の脳機能低下につながった。それからは僕の頭は真っ白で、何をしていたのか思い出せない。冷静になった時には、病院にいた。ただ見ていることしか出来なかった自分がなさけなくて、悔しくて涙があふれた。夜になり、医師が集中治療室から出て来て、彼女は今脳死状態ですと言った。その頃には彼女の両親や友人たちも来ていて、どこからもすすり泣く声が聞こえた。そして、明日の朝には彼女の命の音を打つ心臓が、臓器提供されることとなった。彼女の両親は真っ赤な目をして僕に、「娘と仲良くしてくれてありがとう。最後まで娘は、幸せだったと思うわ。形は変わってもまだ、誰かの中で生き続けられるから。」

と言ってくれたんだ。そこで僕は思ったんだ、彼女もその両親もなんて

強いんだらうって。僕もそんな強さをもつ人になりたい、と。

話を聞き終えた私は、自然と手をたたいていた。だからこの人は、毎日一生懸命に生きているのか、と納得した。人を助けながら生きていた高校生と、娘のことを理解した両親。それを受けつぐ、少年だった夕弦さん。私はそうして優しさのバトンをつないでいくのだと知った。次は私が、そのバトンを受け取っていいのかな。

本当に優しい人は強い。揺るぎない正義を背負って生きるのは難しいと思う。でも、私は優しさのバトンを伝えながら、つらいことを乗り越えていけるような、強い人になりたいと思った。

